

応用生態工学会ニュースレター  
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)  
2003年(平成15年)12月10日(水)発行

No.23

(発行所) 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5第7麹町ビル25号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp HP: http://www.ecesj.com/

(発行者) 応用生態工学会(編集責任者:幹事長 角野康郎,事務局長 西 浩司)

Contents

|     |                            |    |
|-----|----------------------------|----|
| 1   | はじめに                       | 1  |
| (1) | 第8回大会日程決定                  | 1  |
| (2) | アンケートのお願い                  | 1  |
| (3) | 楠田哲也前理事が第19期の学術会議<br>会員に就任 | 1  |
| 2   | 第7回総会報告                    | 1  |
| 3   | 新会長挨拶                      | 2  |
| 4   | 第7回大会を終えて                  | 3  |
| 5   | 発表賞(ポスター賞)                 | 4  |
| 6   | 理事会報告                      | 4  |
| 7   | 会誌編集委員会(拡大)報告              | 6  |
| 8   | 奨励研究採択                     | 6  |
| 9   | 海外派遣報告                     | 7  |
| 10  | 韓日合同セミナー報告                 | 9  |
| 11  | 北陸ワークショップ in 富山報告          | 11 |
| 12  | 東京湾海洋環境研究委員会について           | 12 |
| 13  | 書評・新著紹介                    | 13 |
| 14  | いろいろなニュース                  | 13 |
| 15  | 国際英文誌の発刊について               | 15 |
| 16  | 事務局より                      | 16 |

1 はじめに

(1) 第8回大会日程決定

2004年度の第8回大会は2004年10月1日(金)~3日(日)に、科学技術館(サイエンスホール)で開催します。詳細は順次お知らせいたします。

(2) アンケートのお願い

15ページの国際英文誌に関する報告を読んで、アンケートにお答えください。

(3) 楠田哲也前理事が第19期の学術会議  
会員に就任

応用生態工学会は昨年学術研究団体に登

録されましたが、7月にスタートした第19期の学術会議会員(第5部)に、当学会前理事の楠田哲也九州大学教授が就任されました。

2 第7回総会報告

応用生態工学会では、2003年10月3日(金)10:30~11:30に第7回総会を開催しました。まず冒頭で、日本工営(株)長崎均氏が総会議長に選出され、議事進行が行われました。以下主要事項の報告を行います。なお、総会資料は学会ホームページに掲載しています。

(1) 報告事項

一般経過報告、会員状況報告、会誌編集報告、海外学会等への派遣(2名)、奨励研究申込み状況報告(1件)、五ヵ年計画のまとめを報告し、承認されました。

(2) 決議事項

まず、2002年度(平成14年度)の事業報告、決算報告が角野幹事長から、監査報告が大矢監事から行われ、承認されました。続いて2003年度(平成15年度)の報告として、事業計画および予算案について幹事長から説明が行われ、原案どおり決議されました。

さらに、今回は役員改選年度に当たっていることから、廣瀬会長から役員候補届出の結果の報告および候補推薦委員会からの推薦候補の紹介が行われ、第4期の会長、副会長、理事、幹事長、幹事、監事について選出されました。選出された方々の名簿は次ページに示すとおりです。

最後に名誉会員について、理事会から推薦のあった琵琶湖博物館館長川那部浩哉氏(前会長)、豪州クイーンズランド大学名誉教授橘川次郎氏(元副会長)、北九州市立いのちのたび博物館館長小野勇一氏(前監事)の3氏を名誉会員とすることが決議され、総会は終了となりました。

### 3 新会長挨拶

応用生態工学会 会長 廣瀬利雄

去る10月3日に開催されました第7回総会において、第4期の会長に選出いただきました廣瀬です。

応用生態工学会は、生態学と工学の融合を目指して、1997年に研究会として発足しました。発足にあたっては発起人の方々および多くの方にご支援・ご尽力いただきました。以来さまざまな活動を行うなど順調に発展してきましたが、昨年学術研究団体登録を行い、第6回総会において研究会から学会へと名称を変更しました。したがって、今回が学会としての最初の総会でした。参加いただいている会員の皆様には、深く感謝するとともに、今日の学会の発展を共に喜びたいと思います。

我が国は今、明治維新・終戦にも匹敵する社会的価値観の転換が求められている時とされています。次の世代にどんな自然環境、社会を引き継ぐべきかが問われています。応用生態工学会はまさに今、社会的に求められている学会であると思います。社会的使命を負っているとも言えます。

このたびの総会では、副会長、理事、幹事、監事などの役員の方々もご選出いただきましたが、新役員の皆様とともに、より一層の学会の発展にお役に立てるよう頑張っていく所存です。

さて、今回の大会は、東京以外で行うものとしては2回目でありますが、発表数でも参加人数の点でも最多となりました。公開シンポジウム、ミニシンポジウムなど魅力的な企画もあり、また、地元のいろいろな取り組みの現場も見ることができ、大変有意義なものとなりました。大会の企画・実行にご尽力いただいた運営委員・実行委員の皆様にご感謝申し上げます。今後も定期的にいろいろな地域で開催できるよう、務めて参りたいと思いません。応用生態工学では、地域の方々の交流や連携が重要視されますので、大会もその1つの契機になるものと期待されます。

最後になりましたが、会員の皆様のご活躍を祈念し、会長就任の挨拶といたします。



廣瀬利雄新会長の挨拶

#### 第4期役員名簿

|         |  |
|---------|--|
| 会 長     | 廣瀬 利雄 (財)国土技術研究センター顧問)   |
| 副 会 長   | 小倉 紀雄 (元 東京農工大学教授)<br>玉井 信行 (金沢大学教授)<br>谷田 一三 (大阪府立大学教授)   |
| 理 事     | 阿部 學 (NPO 法人フタバパル理事)<br>池淵 周一 (京都大学教授)<br>井上 康平 ((株)緑生研究所代表取締役)<br>大矢 暁 (応用地質(株)相談役)<br>桜井 善雄 (信州大学名誉教授)<br>佐藤 正孝 (名古屋女子大学名誉教授)<br>鹿野 久男 ((財)休暇村協会常務理事)<br>島谷 幸宏 (国土交通省武雄工事事務所長)<br>竹門 康弘 (京都大学防災研究所助教授)<br>福岡 捷二 (広島大学教授)<br>松田 芳夫 ((財)川ノ口整備センター理事長)<br>三島 次郎 (桜美林大学名誉教授)<br>森下 郁子 (大阪産業大学教授)<br>矢原 徹一 (九州大学教授) |
| 幹 事 長   | 角野 康郎 (神戸大学教授)   |
| 副 幹 事 長 | 清水 義彦 (群馬大学助教授)  |
| 幹 事     | 加賀屋 隆 (東京大学助手)<br>島崎 由美 (国土環境(株)企画室長)<br>清水 康行 (北海道大学大学院助教授)<br>清野 聡子 (東京大学助手)<br>高橋剛一郎 (富山県立大学短期大学部助教授)<br>日置 佳之 (鳥取大学農学部助教授)<br>遊磨 正秀 (京都大学生態学研究センター助教授)   |
| 監 事     | 加藤 昭 ((財)ダム水源環境整備センター理事長)<br>田畑日出男 (国土環境(株)会長)   |

(アイウエオ順。所属は2003/10/3現在)

## 4. 第7回大会を終えて

大会実行委員長 原田圭助(西日本技術開発(株))

第7回大会は琵琶湖大会以来の西日本開催となり、遠方からも多く参加頂き、盛況のうちに終わりました。学会となって初めての大会ということで、実行委員も緊張して当日を迎えました。総会から始まった3日間という長丁場を大きなトラブルなく無事に終了できたのも、ひとえに実行委員をはじめ、役員や参加者のみなさんの御協力によるものです。ここに改めてお礼を申し上げます。

大会は10月3日の総会・エクスカージョンから始まりました。エクスカージョンでは、遠賀川、紫川、山田緑地等の北九州市近郊の事例を見学しました。やや駆け足になった感がありましたが、環境都市北九州の一面を紹介できたかと思えます。

4日からは口頭発表が始まりました。かなり先進的な事例も多く、非常に感心したのと同時に、情報収集の場としての大会の役割を再認識しました。これらの多数の研究が日本各地で進められている背景には、当学会の存在もあるものと感じ、学会の役割と責任を強く感じた次第です。

4日の午後からは、オーストラリアからグリフィス大学教授のBunn先生をお招きし、『川と川辺のリンケージ：健全な河川生態系を修復するために』と題して、公開シンポジウムが行われました。吉岡先生、中村先生の発表との共通点も多く、大変興味深いシンポジウムとなりました。一方、気候や地形の違い等による違いもはっきりと表れ、日本の独自性についても明確になりました。

公開シンポ後に行われたポスター発表は、多くの参加者に恵まれて、盛況となりました。回を重ねるごとに参加者の工夫がすすみ、かなり洗練されてきたという声をあちらこちらから聞きました。なお、事務局の手違いにより、発表規定でお知らせしたサイズより一回り小さいボードにポスターを貼り付けることになり、一部の発表者に多大な迷惑をおかけしてしまいました。ここにお詫びをして、反省点を次回以降の実行委員に引き継ぎたいと考えています。



公開シンポジウムでの総合討論

大会の最後の締めくくりは、『『有明海・八代海ミニシンポジウム - 森・川・海の自然連鎖系を考える - 』』と題して、九州の地域性を反映したミニシンポジウムが行われました。森林、海域、農業、行政、河川工学等の様々な立場から、同じ目標に向かって、具体的な数字を持ち寄ったシンポジウムは、大変画期的なものでした。会場から「非常に感動した」との意見もあり、これからの議論の盛り上がり大きな期待をもちながら、閉幕となりました。

最後になりましたが、私の至らぬ点もあり、実行委員の方から反省点が寄せられてきています。反省点は整理し、事務局を通じて、次回以降の実行委員に引き継ぐことにより、より良い大会にしていきたいと考えています。



口頭発表は、熱心な質問が相次ぎました



## 5 発表賞 (ポスター賞)

発表賞選考委員長 角野康郎幹事長

応用生態工学会では、発表や研究を今後さらに奨励することをねらいとして、昨年度ポスター賞を設けましたが、今年度はさらに口頭発表についても賞を贈ることとなりました。ポスター賞は昨年度と同様に一般投票部門、選考委員会賞を選定し、大会期間中に表彰を行いました。以下その結果を報告します。口頭発表については次のニュースレターで発表します。

### (1) 一般投票部門：

P-12.「都市近郊に残された素堀水路内の魚類群集に関する調査」田代優秋(徳島大学大学院工学研究科) 上月康則(同) 佐藤陽一(徳島県立博物館) 大久保美和子(徳島大学大学院工学研究科) 山崎敬生(同) 村上仁士(同)

次点：P-17、P-22

### (2) 選考委員会賞：

P-1.「溪流におけるモンカゲロウの産卵場所選択性」田中武志(京都大学大学院工学研究科) 山田浩之(京都大学防災研究所) 竹門康弘(同) 池淵周一(同)

次点：P-8、P-18

一般投票部門では、結論が明確によくわかる、研究テーマ・成果の独自性が高い、統計デザインがわかりやすい、明快な論旨、レイアウトの良さなどから選ばれたようです。また、魚類の生息要因を様々な方向から考察できているとの評価もありました。

次点となったものも含め、投票数の差はわずかでした。それぞれに対し、わかりやすい、論旨が明解という評価のほか、テーマの独自性や着眼点、今後重要となる課題を取り上げていること、具体的・実用的であること、定量的取り組みを評価する意見が寄せられました。

選考委員会賞は、ポスター自体がきれいで、山から海へのつながりはこれから取り組むべき方向ということでP-8を推す声もありましたが、応用生態工学的な面が特によく表れているということで、P-1が選定されました。



ポスター発表では、会場は熱気に包まれました

## 6 理事会報告

応用生態工学会では、2003年9月14日(土)に第22回理事会を、10月3日に第23回理事会(新役員による)を、12月3日に第24回理事会をそれぞれ開催しました。以下、主要事項の報告を行います。

### 第22回理事会

日時：2003年9月14日(土) 13:00~15:00

会場：麴町会議室

出席者：廣瀬、山岸、小倉、玉井、石井、井上、

國井、小林、辻本、事務局西

### (1) 各地の研究連絡委員会について

・各地区の連絡実行組織を規約などに位置づけるのがよい。各地の活動の拠点を明らかにすることで、活性化が図れる。世話人・連絡先を会誌等で広報するのがよいだろう。

・コンサルタントの方が窓口の場合は依頼状を出すなどして手続きをきちんとした方がよい。

(後日持ち回り理事会で以下の規約細則の改正が決定されました。)

### - 規約細則の改正内容 -

第5条(事務局体制)の以下の2項を付け加える。

2 理事会の承認のもとに、地域の研究会をおくことができる。各研究会には、連絡責任者をおくものとする。

3 研究会の名称は、「応用生態工学会“地域名”」とする

・将来的には、東京事務局と地域の研究会の役割分担等を整理していく必要がある。

(2) 第7回大会・総会について

・名誉会員に琵琶湖博物館館長川那部浩哉氏(前会長)、豪州クイーンズランド大学名誉教授橘川次郎氏(元副会長)、北九州市立いのちのたび博物館館長小野勇一氏(前監事)の3氏を推薦する。

・第7回大会での発表賞については、前回同様角野幹事長を委員長にして選考委員会を組織し、選考を行う。

(3) 共同英文誌発刊について

・少し時期的には早いのではないか。足元を固めることも大事であろう。

・現時点では判断が難しいので、情報を集めて編集委員会で検討してもらおう。

(4) 各種主催行事、後援行事について

・韓日共同セミナーの企画については、交流委員会で今後の学会としての対応について検討していただきたい。

・東京湾海洋環境研究委員会については、清野聡子幹事に派遣委員就任を依頼し、学会として今後もシンポジウムを共催していくこととする。

・2004年度の企画の1つとして、過去2回のシリーズ講習会、「生態系保全の基礎知識」と「生態系保全の技術」を基礎に、現地で実際に対象物を見ながら、生態系の保全を考え、討論することを目的にした、シリーズ「現地」講習会を開催する。各地域の研究会の協力もぜひ仰ぎたい。

・NPO法人ラブタージャパンの主催する猛禽類の国際シンポジウムについて、学会の後援名義の使用を認める。

・2004年度の北陸ワークショップシリーズ(新潟を予定)については、陸水学会が新潟で行われる(9月)ことから、それとジョイントすることなどを検討してはどうか。

(5) 次期中期計画の策定について

・2004年2月くらいをめどに、3ヶ年の学会の目標・計画案の策定を将来構想委員会にお願いする。

第23回理事会

日時：2003年10月3日(金)12:20~12:50

会場：九州国際大学文化交流センター

出席者：廣瀬、玉井、谷田、森下、島谷、竹門、大矢、角野、事務局西(委任状6名)

内容：

・普及委員会は、鷺谷前理事から竹門理事に委員長が交替する。

・各委員会の担当理事は、普及委員会は竹門委員長が、将来構想委員会は谷田副会長が兼務し、研究開発委員会は松田理事、パートナーシップ委員会は小倉副会長とする。交流委員会は未定で、辻本委員長と協議して決める。

・五カ年に続く計画については、期間を2~3年とし、内容は将来構想委員会に諮問する。

・2004年度の公開シンポジウム(理事会主導事業)は招聘担当理事を竹門理事とし、招聘対象地域はアジア(韓国・中国等)とする。

第24回理事会

日時：2003年12月3日(水)15:00~17:00

会場：麹町会議室

出席者：廣瀬、小倉、玉井、谷田、阿部、井上、大矢(文書にて意見提出)、桜井、佐藤、島谷、竹門、事務局西

内容：

(1) 2004年大会と公開シンポジウムについて

・開催地は東京、10月1~3日の日程とする。

・公開シンポジウムでの招聘国は韓国とし、竹門理事に人選等を調整していただく。

・中国その他のアジア地域については次期中期計画の中で検討する。定期的な合同セミナー(4年に1回など)の開催を検討してもよい。

(2) 編集委員会報告

・共同英文誌刊行については、当面編集委員長の提案(積極的に進める)どおり進めてよい。

・本件を検討していることを、ニュースレター等で会員に経過報告も含め知らせておくこと。

・事例研究を充実させ、より研究と現場が繋がるような工夫をすることが望ましい。

### (3) 普及委員会報告

・2004年度の企画は円山川での自然再生などを軸に進めてよい。

・コウノトリの保護増殖事業との関係もあるので関係者の先生などに意見を求めること。また、近傍で計画中の湿地再生とも関係することから、開催が決まったら関係者への案内に留意すること。

・地域の研究会について、名称表記の「応用生態工学新潟」は「同北陸」とする。

・韓・日陸水学会で2004年に合同シンポジウムが企画されているので、応用生態工学会での広報等の協力も留意しておくこと。

・翻訳・出版事業について委員会で企画検討して欲しい。

### (4) 研究開発委員会報告

・今年度の奨励研究については、委員会意見(申請受理)のとおり進めてよい。

### (5) その他

・中国地方での企画について検討すること。

・地域の研究会が今後各地に増えていくことが期待される。

## 7 会誌編集委員会(拡大)報告

日時: 2003年10月3日 18:30~21:00

場所: 九州国際大学文化交流センター

出席者: 中村委員長、玉井、島谷、竹門、古川、荒井、長崎、事務局西

内容:

会誌の現状と問題点・今後の特集について

・共同英文誌発刊については、積極的に取り組むこととし、まずはメリット・デメリットを整理して理事会に諮る。

・「意見」への投稿が少なくなった。最近では0件である。

・編集委員長としては、ここ2年程度の間年に3号発行まで引き上げたいと考えている。

・専門編集委員の増強については、何名かリストアップし、委員長および事務局から打診を行う。

・今後の特集としては以下のようなものが考えられ、今後検討する。

\* 環境目標についての「意見」特集

\* 湖沼(琵琶湖、宍道湖、霞ヶ浦など)の特集

\* 都市(大規模面開発)の特集

共同英文誌の刊行について

・これまでの経緯、刊行のメリット・デメリットを整理して、編集委員会としての提案をメール会議でとりまとめ、理事会に諮る(p15参照)。

## 8 奨励研究採択

研究開発委員会では2003年度の奨励研究について審査し、このほど応募のあった下記の1件について採択することとしました。

(研究代表) 平 祥和

大阪府立大学総合科学部理学系研究科  
科博士後期課程1年

(共同研究者) 宮崎 由佳

岐阜県立森林文化アカデミー助手

(研究タイトル)

「トビケラ類の遡上飛行に対するダムの影響」

(研究助成額) 35万円

(研究目的)

ヒゲナガカワトビケラ *Stenopsyche marmorata* は、河川の上流から下流まで幅広く生息する水生昆虫である。幼虫は、川底に造網型の巣を作り、上流からの有機物を渡過して摂食する。また、ヒゲナガカワトビケラの幼虫は河川内において流下しながら成長し、羽化した成虫は陸上で交尾・産卵する。成虫期間は10日前後と短い、産卵前には雌が数kmに及ぶ遡上飛行することがある。治水・利水などの目的で建設されたダムは、河川を流程に沿って分断し、河川内に生息する生物の移動を妨げているといわれている。このヒゲナガカワトビケラも、ダムによる分断で個体群が隔離されていると考えられる。隔離によって種内で遺伝的交流が阻害され、遺伝的分化が生じる。以上のことから、ヒゲナガカワトビケラについてDNA分析を行い、ダムによる遺伝的分化の程度を検討する。

## 9 海外派遣報告

派遣研究員 望月 聖子(大阪府立大学)

当学会による2003年度「海外学会等への派遣」の助成を受け、NINTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON RIVER RESEARCH AND APPLICATIONSに参加してまいりました。その概要を会員の皆様に報告致します。

< Conference について >

今回参加した学会名は、日本語で「第9回河川研究と応用に関する国際会議」になるかと思われます。本学会は1979年より組織化され、2000年のフランス、ツールズでの開催に引き続く第9回目の開催でした。今回の開催地は、オーストラリアのニューサウスウェールズ州のオルベリーでした。この町にマレー・ダーリング委員会の淡水生態学研究所があることが今回の開催につながり、実行委員長はキャンベラ大学のTom博士でした。本学会の中核は「淡水生態学共同研究センター」にあり、行政関係やNPOもスポンサーとなっていました。また本学会の背景には、河川における生物学、生態学、工学、地理学的特徴を応用的に扱った科学雑誌「Regulated Rivers」があります。この雑誌は2002年より、河川の管理や修復といった概念も含む目的で「River Research and Applications」と改名されています。

今回の学会のテーマは「河川システムにおける変異(変化)の特性 The Nature of Variability in River System」であり、河川生態系のマルチスケールの理解を深めることを目的とされていました。そのため様々な分野の河川における変化が報告されました。参加者数は約22カ国から約216人でしたが、多くがオーストラリア国内からの参加(約76%)でした。そのため国際学会というよりは、国内学会のような印象を受けました。今回の学会では、午前に基調講演が組み込まれており、河川分野の第一線で活躍する多くの研究者の講演が聞けました。口頭発表は多く、3会場で同時に進行する日々でした。ポスター発表は、ポスターがティータイムの行われる会場に常設されている状態で、発表時間以外でも毎日のティータイム時

間自由に説明し質問を受けることが多かったです。3日目には、4種類のツアーのうち一種類を選択し参加しました。以上について印象にのこったものを紹介いたします。

< 基調講演 >

カンサス大学のThorp教授による講演「河川ネットワークにおける群集と生態系機能についての統一的概念」は、河川生態系に関わる様々な仮説を取り上げた興味深い講演でした。Thorp教授は「河川生産性モデル Riverine Productivity Model(RPM)」の創造者であり、あらゆる水環境における生物的相互作用、炭素循環、その他水中の様々な要因についての研究を30年間続けている研究者です。

今回の講演では、河川ネットワークにおける仮説は多くの要因で変化してきており様々な視点のものがあることを指摘し、その例として中規模攪乱説や生息空間変化性といった群集反応的な説や、河川連続体説、洪水パルス説、内的生産卓越説といった生態系進化的な説をあげていました。その上で河川ネットワークに関する構想が、空間的かつ時間的スケール、連続性の背景、生態地域、分類上のグループ、生態型といった要因によって変化するものであり、それらを総合的に理解することは河川管理において不可欠であるとしていました。そこで、先に述べたいくつかの仮説を統合する試みを、実際の魚類やミジンコ類のデータを用いて紹介していました。今回紹介された仮説は河川研究の分野で一般的に用いられていますが、これからの河川生態系研究では統合するという新しい方向も必要であること認識させられた講演でした。

< 口頭発表 >

イギリス・バーミンガム大学のMelanieさんの発表「イギリス西南部 Roadford Reservoir の下流域における生物的变化」では、1985-1989年に公的な調査で得られた生物環境のデータと、比較

するために1990-2000年に調査して得られたデー



Thorp 教授の基調講演の様子。

タを分析した結果を発表していました。その結果によると、全体を比較した場合複雑な自然環境変化における有意な結果はえられなかったが、無脊椎動物の種類ごとでは、今回はカゲロウ目などを例にあげていたが、そのサイズなどに変異が得られたとしていました。よって一般的に使われている指標種などによる試験はより細かな群集や種レベルの調査が重要であるとしていました。

英国・生態と水理センターの Micheal さんの発表「イギリスとウェールズにおける、流況と大型無脊椎動物群集の関係を法則化する」では、河川群集と流れとの関係をシンプルにすることは河川管理上必要であるとし、LIFE 方法論について実証したものでした。これは、無脊椎動物のデータを科レベルの群集組成、存在度による重さ、流速の選択性といった要因で指数化し、その相関を検討したものでした。それを過去のデータから確立したのち、実証実験を行った結果も紹介し、その方法の有効性について強調していました。

オーストリア・科学アカデミーの Uwe さんの発表「大河川における底生群集すべての時間的・空間的変異性と環境要因に対する資源活用パターン」は、横断面に調査した結果を元に各サイトが水の動力、堆積物構成、生息空間の安定性によって検討したものでした。それらが無脊椎動物の各分類群と照らし合わせて、RDA (ある環境ベクトルと種ベクトルの関係を見ることで、その環境に

対する種の反応をみるもの)を用いて解析したところ、ミミズ類とユスリカ類において環境要因との関係が得られた例などをあげ、環境要因と群集との関わりについて解説していました。

以上3つの発表は、基本的な目的は似ていても、昔から続いている調査をもう一度見直すもの、できる限り簡単にしようとするもの、総合的に捉えようとするものがあり、あらゆる視点から切りこんでいくヒントを多く得ることができました。

<ポスター発表>

今回、私が行ったポスター発表内容は洪水における、有機物質、無機物質の流下動向をパターン分けした結果を示したものでした。洪水中のこれらの流下動向を示したものは過去にないため、同じ分野の研究者には興味を持って頂けました。質問としては、水質に関するものや、生物の生活型について多くありました。他の研究者のポスター発表をみても感じたのですが、洪水による変化を研究している海外の研究者は栄養素や溶存酸素といった水質に興味をもっている印象を受けました。



ポスターの前で説明中の筆者。

<フィールド・ツアー>

私はマレー川流域の RED GUM といわれるユーカリの一種である木からなる、氾濫原森林ツアーに参加しました。はじめに砂が堆積した水域を見学し、堆積の継続で平原が広がっている現状をみました。次に Billabong (ピラボン)といわれる、タマリを見学しました。タマリといっても日本では考えられないほどの大きさで、湖のようでした。次に氾濫原森林の中でスゲなどの植物が生育しているところを見学し、そのような湿地帯がなくな



りつつある現状をみました。各見学場所では、その場所と関係している研究者が説明や研究内容の紹介を行い、質疑応答する時間が多くありました。RED GUMが巨木でねじれた形で生育していたため、その森林は日本での森林イメージと異なり、閑散とした感じをうけました。途中、マレー川も見学したのですが水の少なさと濁りに驚かされました。同時に、オーストラリアのマレー川流域において、この川の水資源に頼っている事実を考えると先の不安を感じるほどでした。



RED GUM 森林の様子。

<その他>

今回の学会中、ワイン工場内で行われたディナーや、BBQパーティーなどがありました。食よりもワインを好む人が多く、このような場面では酔っている方々と研究以外の話を楽しむといった陽気なものでした。

今回の学会では、私の指導教員である谷田教授と後輩である田中さん以外に、土木研究所自然共生研究センターの萱場さんと河口さん、東京大学の白川さんと吉村さん、京都大学の高尾さんが日本から参加されていました。応用生態工学会で名の知れた方はもちろんのこと、皆様河川研究では優秀な方々で、本学会でお話ができ、お知りあいになれたことを嬉しく思っております。この場を借りまして、学会中お世話くださいました皆様にお礼申し上げます。

末筆ながら、応用生態工学会を通じて、国際学会への参加の機会を与您とさりました会員各位の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 10 韓日合同セミナー報告

竹門康弘(京都大学防災研究所)

2003年8月1日~2日に、徳島において、応用生態工学会後援で韓日共同セミナー『人為的に改変された河川生態系における自然復元の可能性と限界』が開催された。日本と韓国の研究者が、河川生態系の復元や改善に向けて、問題点の整理と新たな方法論開発のための討議を行うことを目的に合同セミナー(全13件の研究発表;8月1日)と現地視察会(8月2日)が行われた。参加者は、韓国から12名、日本から60名、合計72名であった。翌日は、29名が吉野川の河口から第十堰を経て59kmまでの区間を視察し、同河川の人為的な改変の現状とこれからの対策について現場を見ながら議論した。

【日韓合同セミナーの講演者と演題】

(2003年発表順)

- 1)Dr. Woo, Hyoseop (Korea Institute of Construction Technology) / 「韓国における河川生態系の現状および復元の動向」
- 2)Dr. Yoon, Byung Man (Myung Ji University) / 「漢江における砂洲上の植生域拡大」
- 3)鎌田磨人(徳島大学) / 「日本の河川砂洲上における植生繁茂のプロセス」
- 4)Dr. Lee, Chang Seok & Dr. Ahn, Hong Kyu (Seoul Women's University & Korea Institute of Construction Technology) / 「福河川における生息場所型の研究」
- 5)Dr. Choi, Seong-Uk (Professor, Yonsei University) / 「河道内平均水深モデルによる抽水植物上の流れ」
- 6)岡部健士(徳島大学) / 「正木ダム下流の減水区間における水温環境とその評価」
- 7)Dr. Bae, Yeon Jae (Seoul Women's University) / 「韓国における河川生態系と底生動物群集への人為影響」
- 8)Dr. Chon, Tae-Soo (Busan National University) / 「漢江良才川における底生動物群集の変化」

9)竹門康弘(京都大学) / 「砂州の成因や植生発達程度と底生動物群集の関係」

10)Dr. Yoo, Jeong Chil (Kyung Hee University) / 「人為影響河川における鳥類の生息場所利用とその機能変化」

11)浅見和弘(応用地質(株)・浦上将人(財)ダム水源環境整備センター)・伊藤尚敬(国土交通省) / 「三春ダム下流河川への土砂投入及びリフレッシュ放流による河床の改善」

12. 三橋弘宗(兵庫県立人と自然の博物館) / 「ランドスケープスケールにおける河川生態系のハビタット評価と復元」

13. 辻本哲郎(名古屋大学) / 「矢作中流部を例にした河川生態の変質と回復の可能性」

セミナーにおいて、韓国建設技術院の Woo 博士は、山地と雨量の多い日本と韓国では、近代的河川管理の導入に際して防災重視にならざるを得なかった時代背景を語るとともに、人為的改変により劣化した河川環境を回復する事業を公園化の時代と生態系復元の時代とに区分して例示した。前者は、多自然型川造りが箱庭的に行われた 1990 年代前半の日本の実状と酷似しており、河川敷の遊歩道などの写真はどこかで見た風景であった。そして、Woo 博士は、こうした現状を打破し、真に河川生態系を復元するためには、洪水を許容する社会に改めなくてはならないと結論した。

日本では、河川法改正によって河川環境保全が国や地方公共団体の河川事業の目的に加わり、さらに自然再生推進法が施行されたことから、各地の河川において自然復元を目的とした事業が行われようとしている。しかし、河川生態系を復元し、管理するための総括的な方法論については、生態学的にも工学的にも未だ十分な検討が行われていないのが実状である。河川生態系の人為的な変容は、その要因が多岐に渡るだけでなく、源流域の土地利用から沿岸海域までを含む空間スケールに及んでいる。したがって、これを改善するためには、河川生態系の構造と機能を多面的に評価する

ための方法論の開発や、河川ごとに人為的改変の程度や問題点を明らかにすることが必要である。本セミナーでは、各地の事例を見聞することで多面的な問題意識が啓発された。一方、地域や条件が異なっているにもかかわらず、両国の河川で生じている生態系の変質には明確な共通項があることもわかった。それは、近代的な河川管理の導入が、河川の流況と土砂の動態を弱めた結果、河床や河畔の安定化とそれに伴う生態遷移を起こしているという現状である。本セミナーでは、その具体例として、砂州の樹林化や河床の粗粒化などの現象が注目され、とくにダムの建設と運用や砂利採取との因果関係が議論された。ただし、河川流況や河床動態に関わる要因には、1) 降水量の変化、2) 水源地域の森林様式の変化等に伴う蒸発散量の変化、3) 流域の土地利用変化に伴う表面流出と地下水流出のバランス変化、4) 各種用水への取水量の変化などが考えられる。多くの場合は、これらの原因が複合的に関わっているので、現象の解釈には注意が必要であるとの印象を強くした。

両日を通じての議論の中では、河川生態系を復元する上での限界として、以下の6点が挙げられた。1) 日本や韓国では土地の集約的な利用風土のため、地価が高いこと、2) 治水要請との不整合、3) 外来種の適切な管理体制の欠如、4) 人口集中に伴う物質負荷量のアンバランス、5) 合意形成の困難さ、6) 流域一貫の行政体制への改革などが挙げられた。河川生態系を復元する事業を、本質的で実質的なものにしていくためには、多くの研究者・行政者・住民の間でこれらの限界が意識され、解決策を追求することが望まれる。

なお、本研究会の開催にあたっては、京都大学生態学研究センターより公募研究会開催費、京都大学水資源研究センターより印刷経費、土木学会四国支部よりセミナー会開催費の助成を受けた。また周知宣伝に際しては、応用生態工学会に後援していただいた。この場を借りて感謝の意を表す。

## 11 北陸ワークショップ in 富山報告

去る10月25日に、北陸でのワークショップシリーズの第2弾として、「陸 - 川 - 海をつなぐりを考える～健全な物質循環をめざして～」を、北陸地方整備局、富山県、富山市、北陸建設弘済会、(財)富山県高等教育振興財団の後援を受けて、富山市の安田生命ホールで開催しました。

今回は、河川を山地・平野部と海をつなぐ連続したものとして捉え、物質循環、土砂移動、流水、生き物の移動などのさまざまな切口での講演により、全体像と環境回復も含めた将来像に迫り、「循環」に関する理論的な知見を実際の管理の現場にどのように応用していくか、あるいは管理の中で今後求められる研究課題などについて、富山を含む北陸の陸 - 河川 - 海をつなぐりをイメージしながら議論することが目的でした。前日の24日には現地見学会も行いました。以下簡単にその内容を報告します。

現地見学会には、58名の参加があり、天候にも恵まれ、黒部川扇状地を中心にバスで回りました。最初は黒部川での環境保全の取り組みである、権蔵橋「縦工」や6.6kmの水制、5.6kmの魚の待避箇所などを車中から見学しました。

続いて、沢杉自然館を訪れ、天然記念物の杉沢の沢スギについて入善町のボランティアの方々から熱心に説明していただきました。平地でのスギの天然林は極めて珍しいこと、黒部川扇状地の構造が形成するものであることなどを理解することができました。

次いで訪れた黒部川河口のサケの築場は圧巻でした。まさに何十匹ものサケが上流を目指して遡上しているところを目の当たりにしました。説明して下さった、黒部川内水面漁協の松島参事からは、サケに関するいろいろなお話を聞くことができました。

その後、生地の有脚式突堤の設置現場(海底勾配がきつく、侵食も著しい箇所、突堤と礫養浜で海岸を保全)を見学し、有名な黒部川の湧水が見られる生地の共同洗い場(清水庵)では黒部市環境ボランティアの方に案内していただきました。

最後に富山県で取り組んでいる高橋川の川づくりの現場を見て、見学会を終えました。



杉沢の沢スギについて説明を受ける参加者



築場の下流(左)にはサケが群れている

翌25日のワークショップには、125名が参加し、下記の7題の講演が行われました。土砂管理、水循環、物質循環、生物の移動などについての最新の研究成果を聞くことができました。

- 1) 流砂系管理と河川生態系保全 (名古屋大学・辻本哲郎)
- 2) 富山の水循環と海底湧水 (富山大学・張勁)
- 3) 庄川扇状地の水循環機構 (富山河川国道事務所・松本清則)
- 4) 「100 平方メートル運動の森トラスト」による生物相復元の活動 - 知床の海と森をつなぐ循環の復元をめざして - ((財)知床財団・山中正実)



5) 河川の生態循環と連続性 (大阪府立大学・谷田一三)

6) 環境の回復とは - 魚道を例として - (富山県立大学・高橋剛一郎)

7) 溪流の復元 - 人工産卵場の試み - (神通川水系砂防事務所・田村圭司)



講演する高橋剛一郎幹事



総合討論では活発に議論が交わされました

講演後、金沢大学・玉井信行教授(当学会副会長)を座長に総合討論が行われ、循環、移動、つながりという概念に今後どのように実際にアプローチを深めていくか、河川管理の現場へどのように応用していくかなどについて活発に議論が交わされました。

最後に、今回のワークショップでは、富山を中心とする北陸在住の会員の方々に多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

## 12 東京湾海洋環境研究委員会について

2003年1月16日に東京大学海洋研究所において開催された第4回東京湾海洋環境シンポジウム「東京湾の環境回復の目標と課題」は当学会も含む19の共催学会・団体と1協力団体によって開催され、200名を越える参加者があり、活発な議論が行われました。その成果は、月刊海洋「東京湾の環境回復」(第35巻第7号、海洋出版(株))として出版されました。その後、何度かの話し合いの場がもたれ、今後は以下のように進めることが決定されました。

1. 第5回東京湾海洋環境シンポジウムを行う方向で作業を開始する。東京湾の海洋環境の回復に向けた“提言”のとりまとめ活動に着手する。
2. 提言取りまとめに向けた検討組織として、名称を「東京湾海洋環境シンポジウム実行委員会」から「東京湾海洋環境研究委員会」に改める。本組織は今まで同様シンポジウムも開催する。

以下は呼びかけ文からの抜粋です。

現在、東京湾の環境修復に関しては、内閣官房の東京湾再生会議に見られるように行政的取り組みも始まり、社会的関心も高まりつつあります。しかしながら、東京湾の環境に関する基礎的研究、研究体制、人材育成などの基盤環境整備、ならびに行政枠を越えた総合的取り組みについての基本的戦略は十分ではなく、学際的見地からの提言は、今後の東京湾環境の研究と保全、さらには修復への取り組みに不可欠と思われまます。

この提言には、今後の東京湾環境回復策として、具体的環境回復の自然科学的ならびに社会科学的視点での目標を設定し、その目標達成のための行政的課題、研究体制の確立、環境修復の手法、人材育成、情報の共有、研究者・行政・住民との協働など具体的な取り組みが含まれる予定です。

提言は、東京湾海洋環境研究委員会主催による「第5回東京湾海洋環境シンポジウム」で報告・議論の後、委員会で再度修正され、各共催学会・団体の全派遣委員から承認を得た段階で、提言の取りまと



め作業が完了します。最終的には提言は、各委員がそれぞれの派遣母体に報告し御意見を頂いた後、参加学会・団体連名で発表することになります。したがって、今回の派遣委員は、実質的に提言検討をするための学会の代表としての性格を有します。

各地の沿岸・閉鎖性海域の自然再生の取り組みが活発化していますが、その中でも多くの学会が連携・協力する大きな動きとして注目されます。

応用生態工学会では、この東京湾海洋環境研究委員会の派遣委員として清野聡子幹事(東京大学)をお願いすることになりました。今後の動きについては適宜ご報告します。

### 13 書評・新著紹介

#### (1)「ピオトープを考えるヒント」

杉山恵一(静岡大学名誉教授)

「ピオトープを考えるヒント」は私の友人の、木呂子豊彦(きろこ・とよひこ)さんの処女出版である。木呂子さんは岐阜県下で自然環境の復元、いわゆるピオトープづくりを熱心に進めている。この仕事にかかわるひとびとはすべて、子どものころ、身近な自然の中でこころゆくまで楽しい経験を味わったひとびとである。とりわけ木呂子さんは少年の日の面影を失うことなく、情熱をこめてこの仕事に取り組んでいる。

本書は、二部から構成されていて、第一部には、さまざまな実体験にもとづいたピオトープづくりの要点が要領よく述べられている。たんなる技術指導ではなく、ピオトープの思想ともいべきものに各所で触れられていることは、本書の優れた特色のひとつと考えられる。第二部はアメリカでのピオトープづくりの視察旅行の記録である。わが国の自然とは桁外れに広大な自然の中でのピオトープづくりの状況、また自然に対する先進的な思想、法制度などについて詳しく述べられている。自然を愛するひとびとに、ぜひ一読をおすすめしたい一書である。

【出版社】新風舎(しんぷうしゃ)

【価格】1,200円(税別)

【サイズ】B6判 162ページ



#### (2)「野生生物保全技術」

当学会の佐藤正孝理事が共編著者の「野生生物保全技術」が2003年10月に出版されました。わが国で現在実施されている、あるいは近い将来実施が予定されている、野生動植物保全活動について、その政策と施策および技術の領域にわたり広範囲に取りまとめたものです。

【出版社】海游舎

【価格】3,800円(税別)

【サイズ】A5判 350ページ



### 14 いろいろなニュース

#### (1) 地域の研究会について

理事会報告にも示しましたように、各地区の連絡実行組織が規約細則に位置づけられたのを受けて、これまで各地で活動していただいた方々に、あらためて地域の研究会の連絡責任者になっていただくこととなりました。以下にその方々のお名前、連絡先等を記載します。各地でさまざまな活動を希望・企画されている会員がおられましたら、

ぜひお近くの責任者の方にご相談ください。

なお、このほかの地域についても検討中です。  
やってみたいと思われる会員がおられましたら、  
事務局までご連絡ください。

「応用生態工学札幌」

責任者：岩瀬 晴夫(いわせ はるお)  
連絡先：  
(株)北海道技術コンサルタント川づくり計画室  
〒065-0043 北海道札幌市東区苗穂町 4-2-8  
TEL:011-753-5568  
FAX:011-753-4824  
E-mail: [iwaseh@dogi.co.jp](mailto:iwaseh@dogi.co.jp)

「応用生態工学仙台」

責任者：橋本 正志(はしもと まさし)  
連絡先：  
(株)復建技術コンサルタント環境計画部  
〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-7-25  
TEL:022-217-2018  
FAX:022-217-2037  
E-mail: [masasih@sendai.fgc.co.jp](mailto:masasih@sendai.fgc.co.jp)

「応用生態工学名古屋」

責任者：細井 衛(ほそい まもる)  
連絡先：(株)建設環境研究所  
名古屋支店技術部技術課  
〒450-0002 名古屋市中村区名駅 5-38-5WINビル  
TEL:052-565-8017  
FAX:052-565-8018  
E-mail: [hosoi@kensetsukankyo.co](mailto:hosoi@kensetsukankyo.co)

「応用生態工学大阪」

責任者：古川 整治(ふるかわ せいじ)  
連絡先：(株)水建設コンサルタント河川計画部  
〒530-0043 大阪市北区天満 2-2-3 西孫ビル3F  
TEL: 06-6242-0350  
FAX: 06-6242-0884  
E-mail: [kasen@pure.ne.jp](mailto:kasen@pure.ne.jp)

「応用生態工学福岡」

責任者：原田 圭助(はらだ けいすけ)  
連絡先：西日本技術開発(株)環境部  
〒810-0004 福岡市中央区渡辺通 1-1-1 ササビル  
TEL: 092-781-2625  
FAX: 092-726-4880  
E-mail: [k-harada@wjec.co.jp](mailto:k-harada@wjec.co.jp)

(2) 日本学術会議について

応用生態工学会は昨年第19期(7月に日本学術会議臨時総会が開催され、スタート)の学術研究団体に登録されましたが、今期は今後の日本学術会議改革を前提とした過渡期に当たるとのことで、法律改正も含めた改革案もいろいろ議論されているようです。土木工学研究連絡委員会から各関係学会に対し、経過等を紹介する文章が送付されてきましたので、学会ホームページに掲載いたしました。ご一読ください。

(3) 東北ワークショップ in 仙台

東北現地ワークショップ in 仙台「地域の自然環境を保全し、蘇らせるために - 東北の事例から考える -」を、2003年11月21日(金)に東北大学工学部青葉記念会館で開催しました。前日には現地見学会も実施しています。詳細については次号のニュースレターで報告いたします。

(4) 後援行事報告

当学会が後援する下記行事が11月に開催されました。講演記録集の入手等については主催者までお問い合わせください。

国際猛禽類シンポジウム「希少猛禽類の生息環境管理 - 適切なアセスメントのために -」

日時：2003年11月1日(土)

会場：発明会館(東京・虎ノ門)

プログラム：

「北アメリカにおけるオオタカの生息場所選択のパターン」Dr. Patricia L. Kennedy(米国、オレゴン州立大学)

「オオタカの営巣場所選択 - ハビタット選択にリンクする個体の適応度と個体群動態」Dr. Oliver Kruger(英国、ケンブリッジ大学動物学部)

「航空機レーザースキャナーを用いた野生動物の生息環境調査」平田泰雅(日本、(独)森林総合研究所四国支所)

「生態系保全を目指した環境アセスメントの確立に向けて - オオタカ・クマタカ・イヌワシの事例から考える -」関谷義男(日本、新潟大学大学院自然科学研究科)

総合討論(座長：阿部學)

主催者・連絡先：NPO法人ラプタージャパン

TEL&FAX:03-3262-0567

E-mail: [raptor-japan@guitar.ocn.ne.jp](mailto:raptor-japan@guitar.ocn.ne.jp)

## 15 国際英文誌の発刊について

会誌編集委員長 中村太士

### (1) 経過報告と概要

応用生態工学会では、日本緑化工学会、韓国緑化工学会、景観生態学会日本支部、日本造園学会などとの共同で東アジア地域を中心とした英文誌発行を検討しています。この共同英文誌は、欧米とは特性・歴史性の異なる森林・河川・海岸・農耕地・都市などの環境を対象にした管理、自然再生およびその技術などに関する研究成果を発表する場となるものであり、今後の応用生態工学の国際的な普及・発展、学会間の連携にも大きな役割を果たすと期待されます。そのため英文誌のミッションを、「東アジアを中心とした自然環境の保全・利用・再生、その科学・技術・計画・政策に関する論文掲載」と考え、研究材料や研究手法で規定せずに、応用面を重視する予定です。

英文誌は、「ISI Journal Citation Report (ISI-JCR) <sup>\*1)</sup>」への登録を前提にしています。今後は大学評価や学位審査、さらには研究者ポストの獲得などの際に、ISI-JCR に掲載されない学術誌論文は低く評価されることが明らかで、応用生態工学を掲げる研究室がこれから増えて行き、若手研究者の求心力を維持するためにも、英文誌の発刊は必要となっています。残念ながら現状の「応用生態工学」は基本的に和文が中心の学会誌であり、ISI-JCR への掲載は見込めませんし、単独での英文誌発刊は財政的にも投稿英語論文数から考えても、当分不可能と判断しています。

会誌「応用生態工学」は従来どおり和文・英文両方を掲載する予定ですが、この共同英文誌発刊により、さらに実務に則したものとなるよう充実を図っていくつもりです。

英文誌は、現時点での出版会社の概算見積りによりますと、冊子体で7~8,000円、電子ジャーナル <sup>\*2)</sup> で5~6,000円の購読となると思われますが(年4号発刊として)部数によっても変わるため、全体で1000部、一人あたり5,000円の追加負担での実施をめざしています。また、2005年を発刊の一つの目標として検討が進められています。

### (2) アンケートの趣旨とお願い

学会員のメリットとしては、国際的な業績評価が行われる雑誌という論文投稿の受け皿ができること、アジアの応用生態工学的な情報が集約されることはもちろん、会員が海外業務等で活動する際にも大いに役立つと期待されます。

一方、購読は会費の一律増額によらず、会員個人の判断によるものとして考えていますので、購読数が少ない場合は発刊が不可能となることも考えられます。

そこで、各学会ではおよその購読数の把握が求められています。このような状況および予定される購読条件をご理解の上、下記のアンケートにご回答くださいますよう、お願いいたします。なお、E-mail アドレスを学会にお知らせいただいている方には直接メールでアンケートをお願いすることがありますが、どうかご了解ください。

#### アンケート項目

- 1) 共同英文誌が刊行されたら、  
購読する    購読しない    わからない
- 2) 購読するとされた方で、いくらくらいならよいとお考えですか。  
年間 \_\_\_\_\_ 円
- 3) 刊行の形態  
冊子体がよい  
電子ジャーナルでよい
- 4) 共同英文誌に期待することなど  
( \_\_\_\_\_ )

### (3) アンケート回答要領

アンケートには E-mail で応用生態工学会事務局(see@blue.ocn.ne.jp)まで送信いただくか、学会ホームページのアンケートフォームをご利用ください(トップページの「会員の皆様へ(アンケートのお願い)」からお入りください)。

\*1) 世界の学術雑誌の重要度、影響度を評価するためのデータ(引用回数等)と評価システムを提供。

\*2) 購読者が各自発行元のサーバーにアクセスしてダウンロードするもの。

## 16 事務局より

ニュースレター23号をお届けしました。22号より少し間が空きましたが、その間に、韓日共同セミナー(後援)第7回大会、北陸現地ワークショップ in 富山、東北現地ワークショップ in 仙台、国際猛禽類シンポジウム(後援)などさまざまな行事があり、いずれも多数の参加をいただきました。特に第7回大会は北九州市という地域での開催(琵琶湖大会に続いて2回目)であったにも関わらず、351名の参加、62題の発表といずれもこれまでで最多となりました。このためポスター会場は手狭になり、参加者の皆様には窮屈な思いをさせてしまいました。次回からの反省点としたいと思います。大会や各地のワークショップで運営に活躍いただいた実行委員の皆さん、本当にご苦労様でした。

### 2003年度一般経過報告

- 4.3 将来構想委員会(第2回)(麹町会議室)法人化構想等検討
- 4.26 シリーズ講習会・流域環境と空間情報システム「空間情報システム技術と環境保全・創造への途」近藤 昭彦教授(千葉大学)
- 5.13 会誌編集委員会(通算第12回)6巻編集方針、特集等の企画、投稿活性化策等検討
- 5.13 ニュースレターNo.21発行
- 5.24 シリーズ講習会・流域環境と空間情報システム「非特定汚染源制御と地理情報システム」市川 新教授(福岡大学)
- 5.29 河川整備基金助成事業決定通知「応用生態工学の国際的ネットワーク構築(その4)」助成番号15-3-6)-4号 ¥1,500,000.-
- 5.31 2003年度の国際交流海外学会等への派遣者決定(2名)
- 6.4 パートナリシップ委員会(京都タワーホテル)開催。2003年度活動方針等検討
- 6.14 第21回理事会
- 6.20-21現地セミナー「ウェットランドの自然再生事業 - 釧路湿原において - 」釧路市観光国際交流センター(ラムサール記念センター) 241名参加

- 6.21 シリーズ講習会・流域環境と空間情報システム「空間情報の利用技術の進歩と流域水循環の数値モデルの発展」立川康人助教授(京都大学)
- 6.25 第7回大会実行委員会(福岡市)
- 7.14 ニュースレターNo.22発行(第7回大会案内ほか)
- 7.19 シリーズ講習会・流域環境と空間情報システム「衛星リモートセンシングとGISを用いた土石流危険度評価」菅雄三教授(広島工業大学)
- 8.1~2 韓日共同セミナー「人為的に改変された河川生態系における自然復元の可能性と限界」(後援) 徳島大学 87名参加
- 8.29 第7回大会参加者募集開始
- 8.31 会誌「応用生態工学」6巻1号発行
- 9.6 シリーズ講習会・流域環境と空間情報システム「都市環境の調査における空間情報の利用技術」熊谷樹一郎 講師(摂南大学)
- 9.18 第22回理事会(麹町会議室)
- 9.18 次期役員候補選考委員会(麹町会議室)
- 10.3~5第7回大会(総会、研究発表会等)開催(北九州市九州国際大学)
- 10.3 第7回総会、第23回理事会、幹事会
- 10.3 拡大編集委員会開催
- 10.4 公開シンポジウム「川と川辺のリンケージ:健全な河川生態系を修復するために」豪・グリフィス大学 Stuart E. Bunn 教授ほか
- 10.5 ミニシンポジウム「有明海・八代海ミニシンポジウム - 森・川・海の自然連鎖系を考える - 」
- 10.24~25 第2回北陸現地ワークショップ in 富山「陸・川・海のつながりを考える~健全な物質循環をめざして~」(富山市安田生命ホール) 125名参加
- 11.21~22 第1回東北ワークショップ in 仙台「地域の自然環境を保全し、蘇らせるために」-東北の事例から考える-」(東北大学青葉記念会館) 184名参加
- 11.15 2003年度奨励研究実施テーマ決定
- 12.3 第24回理事会(麹町会議室)
- 12.10 ニュースレター23号発行
- 2月 会誌「応用生態工学」6巻2号発行予定

[2003年12月10日現在会員数]

正(学生)会員 1,170名  
賛助会員 51法人